

「ふるさと春日井学」研究フォーラム

Forum for Furusato Kasugai Studies

「ふるさと春日井」まちづくりへの応援メッセージ

『ふるさと意識なくして地域の活性化なし』

会報

NO. 43

2016. 8. 25発行

編集責任：河地 清

Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

第43回「ふるさと春日井学」研究フォーラム

テーマ『コミュニティービジネスと「地域活性化」』

～待機児童問題に取り組むー放課後児童クラブの実践～

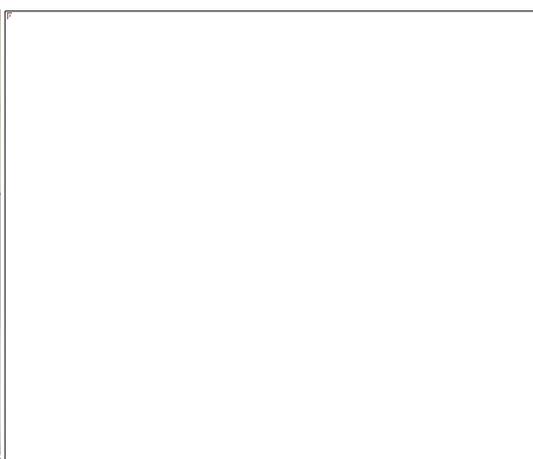
平成28年8月7日（日）市民活動支援センター（ささえ愛センター）において「ふるさと春日井学」研究フォーラムをテーマ『コミュニティービジネスと「地域活性化」～待機児童問題に取り組むー放課後児童クラブの実践～』で開催しました。京 邦治氏(NPO法人くんぱるハウス理事長)に講演をしていただきました。

ただ単に放課後児童を「預かる」という施設ではない。そこには、現代日本の教育で最も欠けているもの欠落しているものが育まれる SPACE であることが講演の中で伝わってきました。「生きる力」＝「自主・自立」を育むというコンセプトで情熱的に取り組む起業家の姿に共感を覚えました。

参加者は38名でした。児童クラブのご父兄、関係者等が多数参加されました。講演後、参加者からの質問・意見が多く出され熱気あるフォーラムとなりました。



京 邦治氏（講演風景）



会場風景

－発表要旨－

I.自己紹介で … 正解はないが、結果がでるのが教育だと始められた。愛知教育大の美術科で工芸や彫刻など学んだ。その中で自分の感性が出た。バイトの居酒屋でお皿を見てふと思った。20歳代後半のこと。「何かできないか」と。自分の思っていたこととギャップを感じ、このことが今の「くんぱる」を生んだ。その思いを実践しているのが「くんぱるハウス」だ。

II.沿革 … 2010年4月に起業。神領町北の部屋の一室からスタートした。2011年7月に近くの貸家に移転した。その後、個人事業から2015年2月にNPO法人として法人格を取得した。

さらに、2015年4月に勝川に開所。神領は出川に移転した。2016年4月には春日井西に新規開所した。

III.待機児童と学童保育について … 待機児童は、一般的には就学前のことをいうが、就学後でも全国に1万人いるといわれる。愛知県では935人、春日井では宮町を中心に22人との統計(2015年)がある。見えないところで「くんぱるハウス」は貢献している。自治体には学校のそばや敷地内に「放課後児童クラブ」がつくられている。通称は「学童保育」だが、法律上は「放課後児童健全育成事業」で、厚労省が所管する。事業を実施する施設は「学童クラブ」「放課後(児童)クラブ」「学童保育所」など呼ばれていて、自治体や設置者によって名称が異なる。春日井市による公認施設は「子どもの家」と呼ばれている。地域の父母が「預けるところがない」と、施設を作る民間の放課後児童クラブは「くんぱるハウス」のほか篠木にもある。留守家庭や共働き家庭に対し、民間では児童クラブのほかに送迎車や食事、習い事などが加わり「プラスの活動」が特色である。市からの補助金は運営費の半分からいで、利用料の徴収を合わせて何とかやっている。

IV.コミュニティビジネスとは … 地域をよくするためのビジネスである。このビジネスは、地域にある課題を解消・改善することで、地域に還元するもの。信念として「している!」「する!」という強い思いが必要だ。コミュニティビジネスとはいえ、利益は出す。しかし、あくまで、それはツールの一つとして考えることだ。強い信念がないと1年ぐらいでポシャル。そういう中で7年ぐらい続けて来られた。コミュニティビジネスでも、利益を出さないと運営が生き詰まってしまい、サービスもできなくなってしまう。ただ、お金はあくまでツールである。

V.問題点と求められているもの … ①人材の確保と人材に対する**待遇**の課題。待遇をよくしないとスタッフがなかなか育っていかない。お金がないところで動いてもらわないといけない。入ってから資格のとれる業界であるが待遇改善が課題だ。②**補助金**に依存(運営費の約半分)する問題点。長くやっていくために、貰わなくてもいいと思われる対策が必要だ。③「**保育から教育へ**」という課題。すでに教育の方に向かっていくが。

VI.くんぱるハウスの実践と実践目標 … 「自立」するための基礎をつくる。「生きる力」「生き抜く力」といってもいい。自分で頑張れる力を付けていくことが、自立すること、

そのための基礎をつけることを目標にやっている。くんぱるハウスでの実践を通して「生きる力をつなぐ」ことに、スタッフはそういう思いで取り組んでいる。日常を通して知らぬ間に身に着けてくれればとやっている。「なぜ生きる力か?」「生きるとは自立していける大切な条件」だと考えている。これは間違っていないと思う。

VII.現代の子どもたちの傾向と原因 … 文科省のホームページを見ると、「欠点」は①思いやりがない②生命の尊厳・人権尊重にかける③正義感にかける④生活習慣の乱れ⑤人間関係の形成する力の低下⑥自尊感情が弱いなどが指摘されている。私の観点からは、①すぐ調子にのる、すぐやってもらう②「だって」できるもんとする③ああ言えば、こう言う④自分よりできない人間をさがす⑤叱られることに慣れていない⑥言われるまでやらないなど。こうした傾向があるが、**親という字**は「木の上に立って見る」と書く。その字の如く、離れたところから見守り、先見し、成長させるために、課題を与え、応援するというスタンスをとることが、子どもたちにとって最もいいことだと思っている。こういう考えを具体的に知らせるために、平成23年から毎月「くんぱるだより」を出して子どもの成長を伝えている。

VIII.大きな目標と実践内容、その理由 … 大人の責務は「**次代につなぐ**」ことだ。先人たちの築き上げたものの上に今の私たちは生きている。これが大きな目標だ。様々な活動から経験値を学ぶ。その経験から自信のきっかけを見つけてほしいと思う。子ども同士での遊びの中で社会性を身に着けてほしい。学びのツールは、「やってあげない」「なるべくやっちゃいけない」「自分でやらせる」。「あえて」失敗させることが必要だということだ。「自分でやらなきゃ一生できないよ」「自分でやったら何か思うことがあるよ」と励ます。そこでくじけちゃう子もいるが、そこから立ち直るために何をするか。たちなおつてもう一回挑戦させる。繰り返して作業することで成長する力が生まれる。そこから学ぶことが大切だ。そうしないと育たない。やってあげることは最低限にし、考え、創造させる機会を与えることだ。自分を支える何かがないと立ち直れないということだ。習慣にしてあげる、普段の生活の中に踏み込むことも必要だ。こうしたことは、子どもの頃誰もが経験してきたことだ。こうしたことを次代につなげていかなければいけない。

IX.これから実践していきたいこと … 子どもに罪はない。悪いのは大人だ。わが子は最も身近な親を見て善悪を身に着けるのではないか。子どもは親に似る、そう感じる。「**親育の時代**」

だといわれる。「子育てをする親育ての時代」、子どもたちに明るい未来をと、憂い、心配し、親のやるべきこと、教育の選択肢を増やしていきたい。未来の主役は子どもたちだ。そのために、自分の持っている知恵や経験などを子どもたちのために伝えていきたい。「大人たちもっと頑張ろうぜ!」としめられた。「保育から教育」への意気込みを語られた情熱が伝わってきた。(記録：塚田 忠雄)

『ふるさと春日井「まちづくり」の風景』

—「コミュニティービジネス」と「地域活性化」を考える—

「地域のことは地域で」解決してゆくをコンセプトとする地方分権化の時代の中で地域の問題を行政単独で解決してゆけない問題は山ほどあります。待機児童問題もその一つです。

コミュニティービジネス（以下 CB）という概念の登場は「地域活性化」の新しい手法として注目されています。今後益々増えて行くでしょう。

何が新しい発想かと言えば、行政サイドで解決して行くべき性質の社会問題に、経営やマーケティングの概念を導入したことです。社会問題（地域問題）解決と言う点では行政的であり、マーケティング手法を活用すると言う点では企業（経済効果）サイド的です。経済性（営利）の追求と、社会性（地域貢献）の追求が適切にマッチングした組織（NPO）なのです。従ってCB活動は、地域貢献を主体とした立派な「地域活性化」の活動といえます。地域の問題を地域完結的に地域住民の社会的、生活的に解決する手法です。

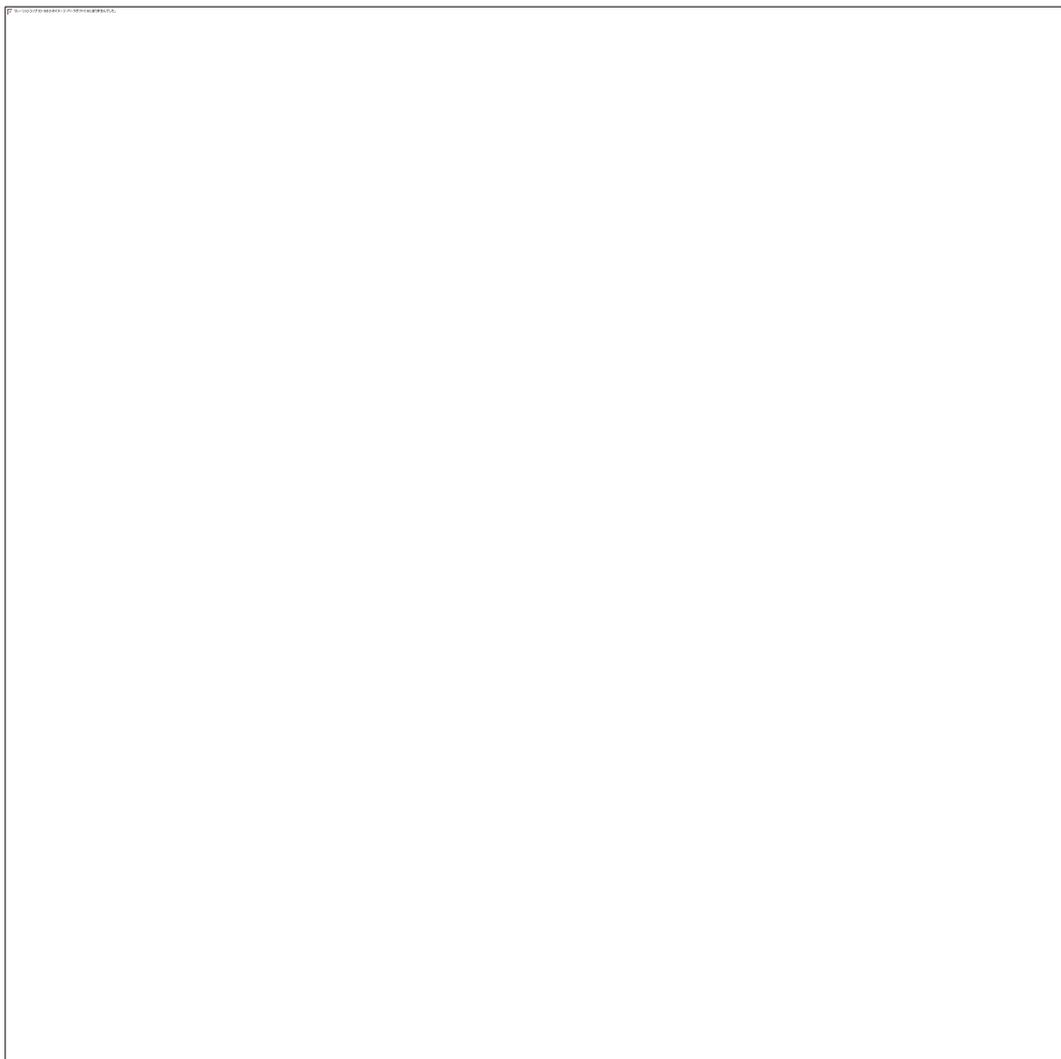
NPO法人くんぱるハウスは、社会構造が生み出した教育問題＝「待機児童」問題に正面から取り組んでいる組織です。労働環境（就業形態の多様化）の問題、経済的問題、家族形態（核家族化）の問題等により健全育成されなければならない子供達へのしわ寄せは現代社会の深刻な問題です。教職（小学校教諭）に就いていた体験と皿洗いのアルバイトに就いていたときの人生苦悩の時を経て閃いた教育問題への取り組みが「くんぱるハウス」の取り組みであると以前から伺っていました。教師のタイプで言えば「金八先生」のような情熱的、一直線、子供 first のようです。管理教育と言われる今の学校組織の中では組織につぶされてしまいます。

何度か見学に行ってきました。「くんぱるハウス」に集まる子供達は、実に明るく、快活です。ボール遊びをする子、ミニ四駆に夢中になっている子、昆虫を虫かごから出して仲間と騒いでいる子、外に設置された第水槽をプール代わりにしゃいでいる子達、施設の一室にお稽古ごとの、お習字やそろばんを習っている子、宿題を教えてもらっている子、世間の子供達の行う全ての活動が集約されて見守られています。様々な事情と、個性をもった子供達が集団で触れあっています。子供達なりに様々な問題に遭遇しながら切磋琢磨している風景です。ただ管理して「預かる」だけではありません。そこには育む「教育」の姿がみえます。「生きる力をつなぐ」「自主・自立」の心を養うというコンセプトで活動されている理事長京先生の教育に対する信念と、「やりきる」という覚悟をひしひしと感じ、この取り組みに大いに共感を覚えた次第です。親の立場からは、金銭的負担はあるものの、何よりも我が子が、伸び伸びと活動してくれていることの安心感がお金には換えられないものとしてあるのではないかと拝見致しました。

このように、CB活動の目的は、「人間性の回復」「社会問題」の解決「文化の継承・創造」を通して、地域社会の自立・活性化、地域コミュニティの再生などを図ろうとするものです。地域での新しい課題解決のためのビジネスの場を形成し地域における創業機会、地域雇用をも生み出してきています。

CBは、地域住民自らが主導し実践します。そして活動主体たる住民は、社会に貢献しているという満足感、やりたいことをやるという自己実現の満足感、生き甲斐を得ることができます。しかし、さらに事業目的を継続的にかつ自立的に推進するための財源は、自ら確保していかなければなりません。ここに、経営、マーケティングの手法が導入されなければならないのですが、企業の論理である、競争、排除、駆逐といった概念は馴染まないことも事実です。行政側の助成金以外のきめ細かい支援と主旨に賛同する協力者の支援があってこそ事業の継続性がなりたって行くものではないかと思います。

(資料「くんばんだより」)



(文責：河地 清)

次回

第45回

「ふるさと春日井学」研究フォーラムの ご案内

「ふるさと春日井」の魅力を再発見するFORUM

「ふるさと意識なくして地域の活性化なし」

「地域活性化・まちづくりの応援メッセージ」

Forum for Furusato Kasugai Studies

Forum テーマ：

『文化施設を活用した「地域活性化」』

日 時：平成28年10月2日（日） 午後1時30分～3時30分

場 所：市民活動支援センター（ささえ愛センター）八幡小学校西側

TEL：0568-56-1943（〒486-0837 春日井市春見町3番地）

講 師：鳥羽 都子 氏（前財団法人かすがい市民文化財団チーフマネージャー）

フォーラム内容：春日井市には、市庁舎と並んでモダンで立派な建物「文化フォーラム」があります。市民会館もあります。書道博物館「道風記念館」もあります。充実した文化施設を擁している30万都市です。「地域活性化」の観点から視たとき、これらの施設が活かされて周辺地域が活性化しているかと問われると、YES とはいいいがたいものがあります。文化と経済が結びつかないのです。文化を活かした経済効果とは・・・・・・後はFORUMで（非会員の方のみ資料代500円徴収させていただきます。）

※事務局：〒486-0825 春日井市中央通り2-9 TEL・FAX0568-82-5973 会長 河地 清

mail address:kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

かすがい市民活動情報サイト：<http://kasugai.genki365.net/>

[ふるさと春日井学検索](#)

